

明治大学教養論集 通巻277号 (1995・3) pp.1-16

## キーツの「イザベラ；またはメボウキの鉢」 について

小 西 康 雄

短い生涯において、キーツは、未完の数編を除けば、五編の物語詩を残している。創作の順序で言えば、『エンディミオン』(*Endymion*) (1817), 「イザベラ；またはメボウキの鉢」(“*Isabella; or the Pot of Basil*”) (1818), 「聖アグネス祭前夜」(“*The Eve of St. Agnes*”) (1819), 「つれなき美女」(“*La Belle Dame sans Merci*”) (1819) および「レイミア」(“*Lamia*”) (1819) の五編である。

この小論では、「イザベラ；またはメボウキの鉢」を採り上げ、これを、長編である『エンディミオン』は別として、他の三編の比較的短い物語詩と対比させて、その特質の一端を探ろうとするものである。

当時のイギリスにおいては、イタリアのロマンスが流行し、とくにボッカチオの翻訳や翻案は人気があった。キーツとその友人である詩人のレノルズは、ボッカチオの物語集『デカメロン』(1348-53)の詩による翻案を試みようとした。彼らは、同時代のイギリスの詩人たちに対しては批判的で、ルネサンスの詩人たちを賞賛し模倣していたのである<sup>(1)</sup>。キーツは、1818年2月、『デカメロン』の「第四日目第五話」をもとに「イザベラ；またはメボウキの鉢」に着手し、四月にこれを完成させた。この作品は詩集『レイミア、イザベラ、聖アグネス祭前夜その他の詩集』(*LAMIA, ISABELLA, THE EVE OF ST. AGNES, AND OTHER POEMS*) (1820) に収められている。

なお、この詩は、イタリアの詩人たちや、その詩の16世紀のイギリスの翻訳

者たちが好んでよく用いた ottava rima (脚韻が abababcc の弱強五歩格八行) 63連から成っている。

この詩を読み進める前に、題名になっているメボウキについて触れておきたい。これはシソ科の多年草で、芳香があるため、化粧品やスープやソースに用いられる。ペルシャやエジプトでは墓の草とされる。この草には不気味なイメージがある。湿った石の下にこの草を置くとサソリに変わるとか、匂いを嗅ぐだけで頭の中にサソリがわいて苦痛と死をもたらすとか、言われている。こうした言い伝えはイタリアから広まったとされる<sup>(2)</sup>。

この物語詩は、互いに強く惹かれ合う二人の若者たち、イザベラとロレンゾの描写から始まる。第1連の冒頭、

美しいイザベラよ 哀れな純情の乙女イザベラよ

愛の神を崇める若い巡礼者 ロレンゾよ

二人は 胸のときめきや恋の病を覚えないでは

同じ家に住むことができなかった<sup>(3)</sup>

Fair Isabel, poor simple Isabel!

Lorenzo, a young palmer in Love's eye!

They could not in the self-same mansion dwell

Without some stir of heart, some malady; (I, 11. 1-4)<sup>(4)</sup>

のイザベラを描写する言葉である“Fair”や“poor simple”，ロレンゾを表す“a young palmer in Love's eye!”は、この若い二人の清純で無垢な様子を示すものであるが、この二人はあまりにも純情なため、互いに自分の愛を相手に打ち明けることができない。この胸の内の苦しみが、連を追うごとに強く描写されて行く。第4連の、

長い五月一杯 こういう悲しい状態にあったため

彼らの頬は 六月の初めには さらに蒼ざめた

A whole long month of May in this sad plight

Made their cheeks paler by the break of June: (IV, 11. 1-2)

は、こうした状態が続いている時の流れを明白に示している。季節の流れは、これからの物語の推移と巧みに重なっていることにも注意したい。

続く第5連でも、愛を打ち明けられないロレンゾの苦しみが述べられるが、

「あの人がどんなに病んでも 僕には話かけられない

しかし是非ともこの恋ははっきり伝えたい

もし見合わす顔が恋を語るなら あの人の涙を飲みほそう

そうすれば少なくとも彼女の憂いは去るだろう」

‘How ill she is,’ said he, ‘I may not speak,

And yet I will, and tell my love all plain:

If looks speak love-laws, I will drink her tears,

And at the least ’twill startle off her cares.’ (V, 11. 5:8)

の、「あの人の涙を飲みほそう」(I will drink her tears) は、この物語の結末と関係のある重要な言葉である。さりげなく語られているこの言葉は、実は、恐ろしい予感でもあったのだ。

第7連から、二人の間に、そして物語の流れに、変化が生じて来る。胸の苦しさに耐えかねたロレンゾは、意を決してイザベラに愛を告白する。愛を告白したロレンゾとその愛を受け入れたイザベラとの描写、

そういうと 曾て臆病だった彼の唇は勇敢になり

彼女の唇と露深い韻をふんで詩を歌った

その祝福は大きく あたかも六月に抱擁された  
元気な花のように 幸福がいよいよ大きく増した

So said, his erewhile timid lips grew bold,

And poesied with hers in dewy rhyme :

Great bliss was with them, and great happiness

Grew, like a lusty flower in June's caress. (IX, 11. 5-8)

にも、最も美しい季節である六月に愛が成就されたことで、この二人の幸福が強く表現されることになる。さらに、続く第11連、

こっそりと二人はまた忍び逢った、夕暮れが

その快いベールを星たちから取り去らぬうちに

こっそりと二人は忍び逢った 毎晩夕暮が

その快いベールを星たちから取り去らぬうちに

ヒアシンスと麝香のあずまやの中で秘かに

誰にも知られず うわさもたたずに

All close they met again, before the dusk

Had taken from the stars its pleasant veil,

All close they met, all eves, before the dusk

Had taken from the stars its pleasant veil,

Close in a bower of hyacinth and musk,

Unknown of any, free from whispering tale. (XI, 11. 1-6)

は、官能的な描写であるが、表現上もこの詩の中で特徴を持った連である。始めの4行は、ほとんど同じ2行のリフレインになっている。この繰り返しは、恋人たちの秘めやかで幸せな逢瀬が続いている様を、形の上からごく自然に伺わせる効果を生じている。また、ここに現れている流麗な〔1〕音の流れの繰

り返しも効果的である。

第14連から第20連までの七連では、物語はこの二人の恋人たちから離れ、主にイザベラの二人の兄の話になる。この兄たちは、金持ちではあったが、貪欲で傲慢、残忍で臆病、富を求めて他人を搾取する守銭奴である。この詩のかなり多くの部分を用いて彼らを描写するキーツの筆致は、具体的であり、強烈である。執拗なまでの攻撃である。「松明の照らす鉱山や騒々しい工場では／兄弟のために幾多の疲れた手が暑さにうだった」(And for them many a weary hand did swelt/ In torched mines and noisy factories,) (XIV, 11. 3-4) にある「鉱山」や「工場」など、この物語にはそぐわない言葉に思えるが、このあたりの情景は、キーツが当時、イングランド北西部の工業地帯であるランカスターを訪れており、そこで見た産業の悲惨な状況を映し出すものだとも考えられている<sup>(5)</sup>。

イザベラの貪欲で残忍な二人の兄の登場で、物語は悲劇に向かって進んでいくことになる。この二人の兄は、妹のイザベラがロレンゾと密かに愛し合っているのを知って、驚愕する。というのは、彼らは、イザベラをある金持の貴族に嫁がせようとしていたからであり、しかも、ロレンゾは自分たちの使用人だからである。貪欲で残忍な彼らは、ロレンゾの殺害を計画する。そして、ある朝、言葉巧みに商用と称して、ロレンゾを連れ出す。出発する時、恋人たちは別れを告げる。

見上げると 内側の格子戸越しに 彼女の明るい顔が  
喜びに溢れて笑っているのが見えた

When, looking up, he saw her features bright

Smile through an in-door lattice, all delight. (XXV, 11. 7-8)

あるいは、

さようなら　すぐに戻ります」「さようなら」と彼女もいった  
彼が行くとき　彼女は陽気に歌を歌っていた  
Good bye! I'll soon be back.' 'Good bye!' said she--  
And as he went she chanted merrily. (XXVI, 11. 7-8)

という、恋人たちの別れの明るい描写は、読者には、ロレンゾが殺されてこれが二人にとっての永遠の別れになることが分かっているだけに、巧みである。

そして、ロレンゾは殺されるとも知らず、イザベラの二人の兄と、家を後にする。

こうして二人の兄弟と　既に殺されたも同様の  
ロレンゾは、美しいフローレンスを過ぎ  
アルノー川が狭まった岸の間を　声高く流れ  
ゆれる芦と共にゆれて……

So the two brothers and their murdered man  
Rode past fair Florence, to where Arno's stream  
Gurgles through straitened banks, and still doth fan  
Itself with dancing bulrush... (XXVII, 11. 1-4)

における1行目の“their murdered man”という表現は注目すべきである。所有格“their”は、ロレンゾがもうすでに彼ら二人の手中に落ちていることを暗示しているととれる。続く“murdered”も、さまざまに論じられている表現であるが、“to be murdered”の意である。上の4行は、荒々しい動きを感じさせるところだが、とくに、“Gurgles”〔gá:rglɜ〕という語の響きが効果的である。

このようにしてロレンゾは森に誘い込まれ、

ロレンゾは 殺され 埋められた

彼らの素晴らしい恋も この森の中で終わった

There was Lorenzo slain and burried in,

There in that forest did his great love cease. (XXVIII, 11. 1-2)

と、殺害の状況そのものは詳しく述べられることはなく、単純な筆致で、ロレンゾが殺されたことが述べられる。この箇所も、いたずらに残酷な状況を克明に描くのを避けることによって、かえって、凄味が生じてくる。殺人者は馬を走らせて家へ帰るのだが、この第28連の最後の行、「二人とも殺人罪という富める重荷を背負っていた」(Each richer by his being a murderer) には、強欲な二人に対する痛烈な皮肉がある。

物語は、また新たな局面に入っていく。恋人が帰らないことに、イザベラは不審を抱くが、兄たちはごまかし続ける。帰らぬ恋人を待ちわびて、イザベラは憔悴して行く。

秋も半ばになると 夕暮れには早くも

遠くから冬の息吹きが訪れるのであった

病気にかかった西風は 金色に染まった

葉を落としては 藪や木々の間に

木の葉の死の乱舞を演じさせ

冬が北の洞穴から さまよい出てくる前に

すべてを裸にしてしまうのと同じように

イザベラは 徐々に衰弱して美しさを失っていった

In the mid days of autumn, on their eves

The breath of Winter comes from far away,

And the sick west continually bereaves

Of some gold tinge, and plays a roundelay

Of death among the bushes and the leaves,  
To make all bare before he dares to stray  
From the north cavern. So sweet Isabel  
By gradual decay from beauty fell, (XXXII, 11.1-8)

上の第32連は、イザベラの憔悴して行く様と時の流れ、季節の推移とが巧みに融合されている優れた描写と言えよう。愛の告白が出来ずに苦しんだのが五月で、愛の歓びに浸ったのが六月。冬も近い秋の今、恋人の帰りを待ちわびるイザベラは、美しさを失っていく。そして、

もし何よりも恐ろしいひどいことがなかったら  
彼女は何も知らずに死んだことであろう  
And she had died in drowsy ignorance  
But for a thing more deadly dark than all. (XXXIV, 11. 1-2)

とあるように、あることを境に、物語は後半に入っていく。

この「何よりも恐ろしいひどいこと」というのは、ロレンゾの亡霊がイザベラの前に現れたことである。

それは亡霊であった 眠い真夜中  
真の暗がりの中の 彼女の寝床の後ろに  
ロレンゾが立って泣いていた……  
It was a vision.—In the drowsy gloom,  
The dull of midnight, at her couch's foot  
Lorenzo stood, and wept: ... (XXXV, 11.1-3)

この亡霊は、森の土の中に埋められているため、「かつては輝いていた髪もき



たなく汚れ」(Had marred his glossy hair) (1.4), 「また土で詰まった耳には／涙のため泥の溝が出来ていた」(and past his loamed ears/ Had made a miry channel for his tears) (11.7-8) と描かれる。それまでと較べ、このあたりから終局へかけて、筆致はリアルになっていき、恐怖感を募らせていく。

亡霊は、弱々しい震え声で、事のすべてを語る。そして、自分が今埋められている場所の情景を告げ、

エニシダの花咲く墓を訪れて 涙を流して下さい

そうすれば墓の中で僕も安らかに眠れます

Go, shed one tear upon my heather-bloom,

And it shall comfort me within the tomb. (XXXVIII, 11.7-8)

と訴え、姿を消す。

イザベラは、目を覚まして、真実を悟る。

恋しい霊よ あなたは私の無知を教えてくださいました

私はあなたの墓をお訪ねして あなたの目にキスし

朝に夕に 天上にいるあなたのご冥福を祈ります

Sweet Spirit, thou hast schooled my infancy :

I'll visit thee for this, and kiss thine eyes,

And greet thee morn and even in the skies.' (XLII, 11.6-8)

ロレンゾの亡霊は、“vision” (XXXV, 1.1), “shadow” (XXXIV, 1.1), そして “Spirt” (XLI, 1.1 ; XLII, 1.6) と表現されている。いずれにしても、幻、霊的なもの、実体のないものであり、この場合は、イザベラの夢の中に現れた存在である。つまり、イザベラは夢で真実を知ったことになる。

イザベラは、「夢の一部始終を確かめる」(she the inmost of the dream

would try) (XLIII, 1.6) ために、乳母を連れて密かに森へ入る。ロレンゾが埋められている場所を捜し当て、イザベラと乳母は死体を掘り出し、

ペルセウスの剣とは比べにならぬ鈍な小刀で

二人が切り取ったのは 異様な怪物の首ではなく  
死後も生前と同じように優しさの残る

首だった……

With duller steel than the Persean sword

They cut away no formless monster's head,  
But one, whose gentleness did well accord

With death, as life.... (L, 11. 1-4)

と、死体から首を切り落とし、それを密かに持ち帰る。イザベラはようやく恋するロレンゾを取り戻すことが出来たのである。その首を、

彼女は彼の乱れた髪を 金の櫛で鎮め

墓場のような眼のくぼみのまわりに  
まつ毛を揃えて縁どりし 滴る井戸水のように  
冷たい涙で汚れた土を

洗い落とした……

She calmed its wild hair with a golden comb,

And all around each eye's sepulchral cell  
Pointed each fringed lash; the smeared loam

With tears, as chilly as a dripping well,  
She drenched away -... (LI, 11. 3-7)

と、慈しみ、鉢に入れて土をかけ、そこにメボウキを植える。イザベラは何も

かも忘れて、日夜このメボウキを大切に守る。彼女が「涙でその木を芯まで濡らし」(moistened it with tears unto the core) (LIII, 1. 8), 「弱々しい涙でそれを育てた」(ever fed it with thin tears) (LIV, 1. 1) ので、メボウキは、勢いよく成長し、美しく香りのよい若葉を繁らせる。前述したように、物語の始めの第5連での愛の告白を決意したロレンゾの「あの人の涙を飲みほそう」という言葉が、ここで恐ろしい意味を持つにいたる。一種のアイロニーである。

また、この木が生き生きしているのは、「人間が恐れるもの　つまり人の目に見えないままで／急いで腐っていく頭から　栄養の他に生命をも／得ているからだ」(for it drew/ Nurture besides, and life, from human feares,/ From the fast moulding head there shut from view :) (LIV, 11. 4-6) という箇所は、メボウキとロレンゾとの合体であり、いわば、ロレンゾの再生と考えられる。イザベラと乳母が、ロレンゾの死体を求めて森に入っていく第43連から、死体を掘り出し、首を切り落とし、それを鉢に入れて、そこでメボウキを育てる第54連までは、ここまで引用してきた箇所が示すように、リアルな描写で鬼気迫るものがある。

物語は結末を迎える。イザベラが憔悴し、メボウキの鉢に涙してその側を決して離れず、また、そのメボウキがあまりにもよく繁っているのを怪しんだ二人の兄は、巧みにその鉢を盗み出して、そっと調べてみると、「それは緑と青黒い斑点で醜いものであったが／ロレンゾの頭であることは明らかであった」

(The thing was vile with green and livid spot,/ And yet they knew it was Lorenzo's face :) (LX, 11. 3-4) のである。ここもリアルな描写である。

メボウキの鉢を奪われたイザベラは、絶望のあまり発狂して死ぬ。この物語詩は、次の第63連で終わる。

こうして彼女はやせ衰え　最後の最後まで

メボウキを求めながら　こうして寂しく死んだ

このような彼女の不幸な恋に同情して

涙を流さない者は フローレンスに一人もいなかった  
この悲しい物語の歌は 人から人へと歌われて

国中に広まった

この歌は今なお歌われている 「ひどいわ  
メボウキを私から奪うなんて！」

And so she pined, and so she died forlorn,

Imploring for her basil to the last.

No heart was there in Florence but did mourn

In pity of her love, so overcast.

And a sad ditty on this story born

From mouth to mouth through all the country passed:

Still is the burthen sung - 'O cruelty,

To steal my basil-pot away from me!' (LXIII)

以上のように「イザベラ；またはメボウキの鉢」を読んで、他の三編の物語詩、「聖人アグネス祭前夜」、「つれなき美女」および「レイミア」と対比させると、この物語詩の特質が明らかになってくる<sup>(6)</sup>。

詩全体に関しては、この詩は感傷的であると言える。この詩も他の三編の物語詩も、主題は愛であり、その愛も、「聖アグネス祭前夜」を除けば、死に結びつくものである。「レイミア」においては、蛇の化身であるレイミアとリシアスとの愛は、超自然的な存在と人間との間の、成就不可能な不安定で絶望的な愛であって、壮絶なものである。「つれなき美女」の愛は、恐ろしくも美しい永遠の美の幻と死すべき運命の騎士との愛である。そこには、簡潔で劇的な表現の中に、静謐で深遠な一つの悲劇がある。また、「聖アグネス祭前夜」では、互いに仇敵の家に生まれた恋人たち、マデラインとポーフィロが決死の逃避行を行うのだが、ここには、現実の認識、現実の受容がある。これら三編の詩に比べて、「イザベラ」では、冒頭の二人の恋人たちの平板とも言える描写

からすでに、感傷が顔を覗かせていると言えよう。後半の、ロレンゾの亡霊の描写、死体を掘り出すあたりの描写は、感傷を脱したリアルな趣もあるが、全体の基調は、感傷的と言える。

詩全体の基調といえば、この詩のそれは曖昧である。「レイミア」が絢爛、「聖アグネス祭前夜」が華麗、「つれなき美女」が簡潔で静謐なのに対して、「イザベラ」は全体としての個性が希薄である。

キーツの詩には、「夢と現実」という重要な概念がある。夢と現実との融合や離反、軋轢や葛藤といったものが、微妙な関係を保ちながら、詩的世界を創りあげている場合が多い。この「夢と現実」という概念は、今ここで採り上げている四つの物語詩においても、共通項として考えられる。「レイミア」において、リシアスは夢の世界で美女レイミアを激しく恋するが、レイミアが実は蛇の化身であるという真実を知って、命を絶つ。「つれなき美女」の騎士は、妖精の美女と共に在った夢から覚めて、傷心のうちに冷たい荒野を彷徨う。この二つの詩は、夢の中での理想美の享受と覚醒による現実への回帰を表すものとも言える。夢から現実へひき戻されるのと共に、詩も終わる。「聖アグネス祭前夜」では、理想と現実との乖離が問題になる。マデラインは恋人ポーフィロの夢を見る。夢の中のポーフィロは完璧に美しい姿であったのだが、目覚めた時そこにいた現実のポーフィロは蒼ざめていて、冷たくわびしい姿をしている。しかし、マデラインは現実を認めて、それを受容れようとする。そこから二人は新たな旅立ちに向かうことになる。同じ「夢と現実」といっても、「イザベラ」の場合は、この三編の詩とは異なっている。イザベラも、確かに、夢を見た。しかし、夢に現れたロレンゾは、理想の姿ではなくて現実の姿だったのである。この詩の夢は、単なる夢枕に立ったお告げなのだ。他の三編の詩、そしていくつかのオード、にあるような、重要な意味を持つ夢ではない。

この詩においては、物語の進行が止まるところが何箇所かある。つまり、恋と恐怖の物語の筋道から外れる脱線があるのだ。たとえば、イザベラとロレンゾの恋が実ったことが語られた後で、この二人の話から離れて、これまで恋人

たちのために多くの涙が流され、多くの溜息が捧げられ、多くの物語が書かれている、といった一般論が語られる（第12連と13連）。また、イザベラの兄たちの貪欲で残酷な有り様の描写の後では、突然、ボッカチオに対しての礼讃と賛辞が呈される（第19連と20連）。イザベラと乳母がロレンゾの死体を掘り起こすところでは、なぜ口を開いた墓の恐ろしい話をしなければいけないのか、古いロマンスの優しい歌、吟遊詩人の素朴な歌が歌いたいがそれは古い物語にゆずることにして、この話の本筋に戻っておぞましい調べを味わって頂きたい、と読者に対しての語りかけがある（第49連）。傷心のイザベラを描く終末近くの二つの連では、ほとんど同じ表現で、ああ憂鬱よ、しばらくここに足を止めてくれ、ああ音楽よ、絶望の歌を奏でてくれ、という嘆きが語られる（第55連と61連）。こうした脱線は、中世ロマンスの伝統であり非難されるものではないが、興が殺がれないでもない。他の三編の物語詩においては、こうした大きな脱線はない。そのために、物語が常に一本の筋道に乗っていて緊迫感が持続する。なお、上に述べたこの詩が感傷的であることの一端は、この脱線から生じているとも言える。

この詩に対する評価は、一般的には、芳しくない。ただし、出版当時は、イタリアのロマンスが流行していたこともあって、わりに好評をもって迎えられた。たとえば、チャールズ・ラムは、『レイミア、イザベラ、聖アグネス祭前夜その他の詩集』の中で最も優れた作品である、とした<sup>(7)</sup>。

キーツ自身はこの詩について次のように語っている。

もし僕が批評家なら、「イザベラ」は興味を起こさせる真面目な悲しさを持った“弱点のある詩”だと言うでしょう。レノルズやあなたの批評が正しくない、というわけではありません—僕にはありがたい。でも、出版するためには、そんな批判はなんにもならないのです<sup>(8)</sup>。

まわりの友人たちが高く評価したにもかかわらず、キーツ自身はこの詩に欠点を認め、出版を渋っていたのである。

「イザベラ；またはメボウキの鉢」は、未だ完全ではないにしても、随所にキーツらしい閃きを持っている。官能的な美しさもある。恋、恐怖、死が、リアルに描かれる瞬間もある。この詩は、「聖アグネス祭前夜」、「つれなき美女」そして「レイミア」の前段階の作品と言えよう。

エミー・ロウエルは、キーツが『エンディミオン』の序文として述べたことは『エンディミオン』よりも「イザベラ；またはメボウキの鉢」にこそふさわしい、と述べている<sup>(9)</sup>。以下がその序文である。

少年の想像力は健全であり、大人の成熟した想像力も健全である。しかし、この両者の間には、人生の空間があって、そこでは、魂は不安定な状態にあり、人格は定まらず、生き方には確信が持てず、大志もはっきりしていない。そこから、感傷が生じ、幾多の苦渋がうまれるのだ……

## 註

- (1) Claude Lee Finny, *The Evolution of John Keats* (Harvard University Press, 1936), p. 335.
- (2) 加藤憲市『英米文学植物民俗誌』（富山房、1976）p.54.
- (3) 訳は主として岡地嶺「キーツ」（文修堂、1965）による。他に大和資雄「レイミア、イザベラ その他の詩集」（『世界名詩集大成 第九巻 イギリス I』、平凡社、1962）も参照した。また、変更した箇所もある。
- (4) テキストは、H. W. Garrod (ed.), *The Poetical Works of John Keats* (O. U. P., 1958) および John Barnard (ed.) *John Keats ; The Complete Poems* (Penguin Books, 1977) を用いた。
- (5) Aileen Ward, *John Keats* (The Viking Press, 1963), p. 189. Press, 1936), p. 335.
- (6) 「聖アグネス祭前夜」については『明治大学教養論集』通巻252号（1993）に、「つれ

なき美女」については川崎順之助（編）『変容する悲劇・英米文学からのアプローチ』（松柏社，1993）に，「レイミア」については『明治大学教養論集』通巻244号（1992）に，それぞれ拙稿がある。

- (7) Amy Lowell, *John Keats* (Archon Books, 1969), Vol. 2, p. 446.
- (8) M. B. Forman (ed.), *The Letters of John Keats* (O. U. P., 1960), p. 391.
- (9) Lowell, *op. cit.*, Vol. 1, p. 623.

（こにし・やすお 農学部教授）